

## 第1章 「学生街」形成の諸条件

大東文化大学と板橋区の共同研究プロジェクトである「地域デザインフォーラム」では、さまざまな側面から大学と地域の連携形態を模索しまた実行してきた。なかでも筆者の参加する第3分科会では大学周辺地域の「まちづくり」をテーマに議論を重ね、学生と地域住民のあいだの人的交流の量的・質的な希薄化が（それぞれの集団内での交流も同様だが）、当該地域の「元気不足」の要因であると結論付けた。そこで本章では、まず東京都における板橋区、そして板橋区における大東文化大学周辺地域の社会的・地理的位置づけを把握し、関係諸集団の生活・行動様式を明確に理解して地域の不活性の具体的要因を特定する。その上で、大学に滞留する時間の短い大学生と「地元」で過ごす時間の少ない地域住民とが交流する「元気が出る」時間と空間を、いかにして創造できるかを提案する。

### 板橋区と大東文化大学

大東文化大学のある板橋区は東京都心からみて北西部に位置しており、おおよその地理的範囲は荒川を北辺に南は川越街道までの南北に狭く、北西から南東に長く伸びた形状の地域である。区の西側隣には埼玉県和光市があり、東側は中仙道沿道地域によって画されている。南東端の板橋区役所周辺は池袋近辺の工業化地域を含む都心の一角を成しており、そこから北西に放射状にのびる幹線道路および鉄道沿いには、もとの農村地帯の開発により形成された新興住宅街と、旧農村の名残のある宅地とが混在して広

がっている。大都市の同心円的位相という見方からは、板橋区は山手線周辺以内の「核」となる地域と「周辺」的郊外にあたる荒川以北の埼玉県との中間のいわば「移行」的な空間を占めており、そのグラデーションはちょうど外縁に向かって環状7号と8号、そして新大宮バイパスを越えるごとに段階的に郊外的になってゆく景観に如実に表されている。そこには洋菓子のパウムクーヘンをスライスしたようなイメージがよく当てはまるだろう。

もし環状7号と8号と新大宮バイパスで板橋区を4つの層に区切るとすれば、大東文化大学のある高島平地区は蓮根、坂下、西台、徳丸、四葉の各地区とともに環状8号と新大宮バイパスの間の、やや周縁的な層（第3層）に位置している。この層は蓮根や高島平の団地に代表される公団住宅の密集地域であり、「郊外」型地域に相当するといえるだろう。他方、新大宮バイパスの外側の赤塚、成増、三園からなる地域は農地も多く残り、むしろ「宅地化した農村」の印象が強い。

高島平および大東文化大学の周辺地域は「古くなった」郊外と「宅地化した農村」としての両者の特徴をもつ。1960年代末に開発された高島平団地（1972年竣工）およびその周辺は、老朽化した「ベッドタウン」としての性格、つまり一般的に昼間人口の少なさ（職住分離）、少子高齢化、商店街の衰退、若年人口の流出などの特徴を有している。徳丸や西台の旧農村地域ではそれらに加えて、新住民の流入、地域活動の不活性化が生じている。これらの特徴のおよぼす影響については後段に詳述するとして、ここで確認したいのはこのような大学所在地の「層」の特徴は、大学の地域との関わりを考える上での基本的位置付けを与えるということである。例えば、区内の大学でいえば東京家政大学と帝京大学は環状7号の内側である加賀地区に、日本大学医学部も7号線内の大谷口にある。淑徳短期大学は7号と8号の中間の前野地区に

ある。このような地域性を鑑みれば、大東文化大学による周辺地域へのアプローチのあり方は、大都市の中核にある早稲田大学や明治大学はもとより、板橋区内の他大学とも異なっていて然るべきである。

## 大東文化大学周辺地域の特性と $\mu$ (ミュ-)プラン<sup>(1)</sup>

図1の略図に示されるように、高島平地区と徳丸・西台地区という性格の異なる二つの地区を結びつけるのが不動通りであり大東文化大学である。そのような人の動線の連結のためのひとつのアイデアとしてありうるのが図中に点線で示したラインであり、ギリシャ文字の  $\mu$  に似ていることから  $\mu$  プランという名が付

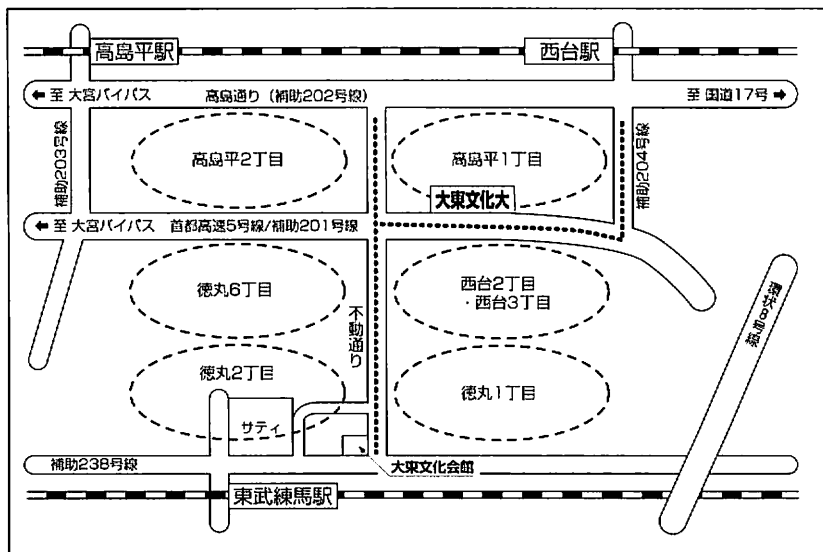


図 1

(1)  $\mu$  プランの詳細は『元気な学生まちづくり』(地域デザインフォーラム・ブックレット[No.17、2007年])を参照。

けられた。しかしながら、図中に楕円で示された各地域住民、および大東文化大学の学生・教職員の動きを熟慮すると、このプランの困難さが浮き彫りになる。まず、この地域の状況を歴史的・地理的に簡単に説明し、 $\mu$ プランの直面する課題を鮮明にしてゆこう。

大東文化大学が池袋から板橋区志村西台町（現在地）に移転したのは1961年のことであり、当時は周辺一帯が「徳丸田んぼ」とよばれる水田地帯だった。そこに高島平の団地・宅地開発がおこなわれ、大学周辺地域も区画整理がなされた。1968年には高島平団地開発に合わせて都営地下鉄6号線（現三田線）が巣鴨駅から志村駅（現高島平駅）まで開通し、1976年には西高島平駅まで延長された。続く1977年には首都高速道路5号線の北池袋・高島平間が開通し、高架下を都道補助201号線が通るようになった。この補助201号線が開通した区域と旧来の徳丸・西台地区の境界を成しており、この道路より北の高島地区には東西南北に整然とした直線道路が交錯し、逆に南に進むとたちまち畦道のなごりのような、地形や用水路に合わせて屈曲した狭い路地が行き交っている。この補助201号線とほぼ平行に、三田線に沿いには補助202号線（高島通り）が通り、高島平地区西端のトラック・ターミナルと中山道を繋いでいる。この二本の道路はともに片側3車線と幅員が広く交通量も多いため、地域住民の生活圏に一定の境界を形成している。首都高5号線及び高架下道路を西側方向に進むと、高島平3・4丁目を過ぎて大きく北方向に曲がって新大宮バイパスと合流する。地図上でみると、補助201、202、204号線と新大宮バイパスに囲まれて、高島平が孤島のように他の地域から隔離していることがわかる。

東武東上線の東武練馬駅、三田線の西台および高島平駅の位置関係は、大東文化大学を囲むようにして逆三角形をなしている。

その逆三角形の南端の頂点から南北に不動通り、北辺の底辺（三田線）と平行に東西に高島通りと高架下の補助201号線が大東文化大学周辺の地域区分を成している。バス通りは国際興業株式会社が成増（東上線で東武練馬より3駅下の板橋区内最後の駅で、池袋から初めて急行の停車する駅）から赤羽（北区の中心駅）の間を走る路線が徳丸6丁目から大東文化大学前を通り、補助201号線を東に抜けてゆく。他に、この地域を走る同社バスは東武練馬から高島平駅経由の浮間舟渡行き、徳丸町から西台3丁目・1丁目を通して志村三丁目駅行きを加え、合計三つの路線がある。東武練馬駅と西台を直接結ぶバス路線は現在存在しない。

### 空白地帯としての大東文化大学の立地条件

地域住民および学生・教職員の両者は、大東文化大学周辺地域の地理的条件によって遠心性と求心性の循環するこの三角地帯を互いに交わることなく「すれ違って」いるのである。住民の通勤状況を考えると、高島平1丁目からは西台駅、高島平2丁目からは高島平駅が最寄り駅であり、いっぽう徳丸1丁目・2丁目の住民はおもに東武練馬駅を用いるであろう。それらの中間にある徳丸6丁目や西台2丁目・3丁目の住民は必要に応じて東西ないし南北に伸びるバス路線を用いるか、自転車によってそれぞれの必要な路線に合わせて通勤していると思われる。もちろん住民の職場は多様だが、都心方面に職場があるものが大多数といって間違いではない。高島平の郊外型の地域形成過程、および徳丸・西台の世代交代（現在の若年・壮年世代は域外に出ているか、域内に残るにしても域外に職場がある）により、一概に職住分離が進行しており、自動車やその他の公共交通手段で通勤するであろう。結果的に、図に示したエリアは三田線方面へ北上する人々と東武

練馬方面に南下する人々とに人流が分断されており、たとえ朝夕の通勤時間でもそれらが交錯することは滅多にない。不幸なことに大東文化大学は、そのような人流の分水嶺に当たる、首都高5号高架下に正門を面して立地しているのである。

このように、大東文化大学は各駅からの通勤圏の周縁に位置しているが故に、大学を中心とした人流の交錯という見地からは、たんに昼間人口が少ないベッドタウンという以上に困難な問題を抱えている。つまり地域住民は通勤経路上を朝は遠心的に出勤し夕方には求心的に帰宅するので、そのどちらの時間帯にも大東文化大学の周りを通ることさえないのである。そして学生はおもに午前中に通勤者とすれ違いに登校し、午後から夕方にかけて、やはり通勤者とは逆方向に、それぞれの自宅に帰ってゆく。しかも大学のバスを使う学生が大半のため、徒歩、自転車、自家用車で行き交う地域住民とは全く接触の機会がないのである。もし、大東文化大学が何れかの駅にもう少し近接していれば、同じベッドタウンだとしても地域住民は大学を横目に通勤することになり、学生との接点も増え、大学の存在感も異なっていたであろう。あるいは学生用バスを廃止すればという意見も繰り返し提出されるが、これは本末転倒で、大東文化大学が現在の位置にあるかぎり、都心に通勤する地元住民との接点は無いまなのである。

交通条件という点で最大の構造的問題は放射状に拡がる三田線と東上線との間の、中途半端に「近くも遠くもない」距離である。板橋区の中心部（南東端）に近づくと、東上線大山駅と三田線板橋区役所前のあいだの距離は直線で約700mと近接しているのに対して、東武練馬駅・西台駅間は約2.3kmと、歩くには「近くない」。そのいっぽうで大学周辺地域でも住宅地としての機能はある程度備えているので、学生や大学教職員を主なターゲットとするビジネスの展開もない。もしさらに郊外的な位置にキャンパスがあれば

ば、あるいは大学の規模がより大きければ、学生向けのアパートや飲食店などの展開があったであろう。つまりキャンパス・タウン的な、大学を中心とした周辺地域の展開を望むには各駅から十分に「遠くない」のである。

## 商業地域としての不動通りの不適切性

また、キャンパス・タウン化したければできるのかという問題もある。地図1に示された地域は表通りを除いてほとんど全域が都市計画法の用途区分でいうところの第一種ないし第二種の「中高層住居専用地域」であり、その中では飲食店の規模などにも制限があり、いわゆる遊興施設は全く作ることはできない。いっぽう不動通り沿いは「近隣商業地域」の区分であり、法律上はカラオケ店、パチンコ店、麻雀店、ミニシアター等の「騒がしい」店舗施設の建設が可能だが、マンションやビルの一・二階がそのような店舗となることは、住民や不動産主の反対があって困難だろう。また、風俗店やダンスホールなどは始めから認められない。結果的に、不動通り沿いには生活密着型の商店、たとえば小規模な飲食店や弁当店、食品の小売・配達業、クリーニング店や理容・理髪店、銭湯、コインランドリー、古着・古本屋、ドラッグストア、コンビニエンスストア、リサイクル・ショップ、100円均一ショップ、歯科・内科、などが立ち並ぶことになる。筆者の担当するゼミ学生がインタビューしたところによれば、不動通り沿いの店舗主のなかには、大東文化大学生の往来が増えてほしいとは思わないと答える方も存在した。つまり静かなベッドタウンとしての環境を維持したいという地域住民の意識があり、「遊ぶ」場所を求めている学生の要望とはむしろ対立しているのである。また近辺には小学校や保育園もあるので、幼児や児童の生育のた

めに必ずしも望ましくない環境要因となるような店舗施設の設置は非常に困難であろう。

商業を切り口として大学と地域の関係を模索するのであれば、高島平1丁目に着目するほかない。幅員の広い補助201、204、204号線沿いは「準住居地域」とされ、駐車場を備えた大型店舗や飲食店の出店が許されている。大東文化大学周辺にもレストラン・チェーンがあるが、価格が比較的高いため学生の利用度は低いようである。しかし、大学から西台駅の間の区画には多くのラーメン店がひしめいており、比較的安いファミリーレストランや喫茶店、洋菓子店、大型古書店も存在するので、これらの潜在的顧客として大東文化大学生の開拓が期待される。事実、大学から西台方面へ徒歩3分程のところにある欧風カレー店は、大学構内で開かれた「高島平フェスティバル」で自店のカレーを販売するなど、大学イベントに協力しつつ顧客を開拓しようと試みている。また、2007年には大学北門の目の前に大型ドラッグストアが開店した。チェーン店であるので品揃えは学生顧客をさほど意識してはいないようであるが、安価で大容量の飲料や菓子類、あるいは化粧品や薬品など学校内の売店や近隣のコンビニエンスストアにない品物が魅力なのであろう、次第に出入りする学生の数が増大している。筆者の観察の限りではあるが、このドラッグストアの出店をきっかけに大学の北辺にかけて学生の行動範囲がひろがりつつあるようである。もしこの傾向を意識的に増進させるような手段があれば（高島平1丁目方面に関する限りであるが）相当有効であろう。

不動通りとの対照例として興味深いのは東武東上線のときわ台から赤塚駅に至る線路沿いの通り（補助238号線）である。1966年から1997年にかけて整備されたこの通りには、東武練馬駅近辺に限ってもカラオケ店、パチンコ店、レストラン・バー、居酒屋、



ラーメン店等が密集し、小規模ではあるが賑やかな一帯を形成している。この道路沿いも不動通りと同じ「近隣商業地域」ではあるが、駅からの距離が近い（むしろ近すぎる）ことから、繁華街としての性格が比較的強く、大規模マンションや住宅街の無いことが大きく異なっている。つまりここは「住」環境ではなく「遊」環境でいいという合意が形成されていると推測できるのである。酔客にしても騒がしい若者にしても、このような駅に近い線路沿いの一帯にいわば「隔離」されることで、そこから住宅街のほうには入り込まないようにして合理的な「棲み分け」ができていのである。線路沿いの一帯は、もとより住環境としては不適切なために繁華街となりうるが、南北に走る不動通りは地域の「住」の部分に直角に切り込んでゆく道であるため、「賑やか」な場所にすることは構造的に困難なのである。

不動通り沿いの徳丸・西台地区には新旧の住民が混在しているが、いずれにしてもベッドタウン化という大きな趨勢を変えることは全く不可能である。2000年にサティ板橋店が東武練馬駅の目前に出店したことは、その衰勢に大きく拍車をかけた。映画館までも併設する複合型ショッピング・センターの吸引力は強大であり、地元のみならず近隣地域から電車に乗り、あるいは自家用車でサティにやって来る顧客も多い。サティはこのすさまじい集客力によって、すでに進行していた徳丸・西台地区と駅前空間の地域的分業を先鋭化させた。通勤者が出て行ったあとに残された、地域の昼間人口の核である主婦もまた、特に若年の主婦層はサティないしは大山や池袋で買物をするようになるので、さらに地元の空洞化が進むのである。また、新住民の週末の過ごし方は多様化しており、地元でなんらかの共同体的ないし消費活動をする機会は減っていると推測できる。これはベッドタウン化に共通の問題であるが、自治体の非活性化、家族別のレジャーの浸透などに

より、週末でさえ地元で過ごさないという家族が増えている。

この状況では学生と地域住民の接点をつくろうにも学生は平日の昼間にのみこの地域にいるし、地域住民の通勤者は平日の夜くらいしか地元におらず、たとえ主婦でも日常生活の自由な時間のほんの一部しか、地元で過ごしてはいないと考えられる。まさに過労社会の典形をゆくのがこのようなベッドタウン地域なのだろう。

## 都市近郊に位置する大学としてのありかた

ここまでの考察で見えてきたことは、さまざまな地域人口グループの動線を考慮しながら彼らと学生との接点を模索し、そこに相互にとってメリットのある「関わりかた」を提供するのが、地域の特色に根ざした大学の必然的なあり方だということである。そして大東文化大学の置かれた高島平、徳丸、西台地域は「住」と「職」機能のみならず「遊」や「商」の機能までもが分離した、いわば「特化と分業」後の地域空間なのである。そのような分断された空間性に合わせた異種グループの接触は時間性的問題と密接に絡んでくる。なにやら難しい表現になってしまったが、以下でこの問題をひもといてゆけば、実際にはそれが意外とシンプルな課題であることが分かるだろう。

人口グループには既に議論した1) 外部通勤者、2) 主婦、3) 商店経営者に加え、4) 地域内労働者、5) 小中学生・高校生・養護学校の生徒、6) 退職後の住民、7) 病気療養中の人やひきこもりの若者などがおもだったところであろう(域外の住民も考慮すべきかもしれないが今回は域内の住民に限定する)。そしてそれぞれが、時間を共有できるところで、大学という空間、あるいは地域という空間においてお互いを結びつけるようにすればよい。以下にまず時間帯を分けて、それぞれの時間帯に合った「関

わりかた」を提供してみよう。

1) 朝を使う。早朝の通勤者がひと段落するころに現れるのはまず小中学生の通学者である。我々の地域には徳丸小、志村5小、西台中があり、小学生については歩道の横断に地元老人会らしき交通指導員がついている。次に保育園や幼稚園の送り迎えが盛んになる、自転車の前後に子供を乗せて疾走する母親もいればバスにのってゆく幼稚園児もいる。続いてデイケアセンターへの迎えと思われる、車椅子の補助装置などがついたワゴン車が路地を行き交い、ケアを受ける方を乗せてゆく。以上が朝7時から10時くらいまでの動きである。ここにどう絡んでゆくか。児童の通学上の安全確保、母親の都合が悪いときの保育園などへの送迎、要ケア老人の外出の介助などなど、やり方はいろいろあるし、むしろそれぞれの責任団体の必要性によって学生ボランティアを提供するのが望ましいだろう。そのための連携・連絡の役割を、大学の地域連携センターが担うことができる。朝の得意な学生は少ないかもしれないが、介護福祉士を目指して実習などに参加する学生は非常に多く、あるいは教員を目指す学生にも参加のインセンティブがあるだろう。

2) 昼を使う。上記では空白とか空洞といった言葉を多用したが、昼間だからといって地域の人口が無くなるわけではない。この時間帯のターゲット人口は、ひと仕事終えた主婦や、タクシー運転手、その他の地元労働者である。彼らが昼食をとり外に出てくるところを、例えば大学内の食堂を解放して(現在でも制限は無いはずだが) 食事をしてもらうこともできる。あるいは学生食堂に飽きた学生とともに、一種の地元

のグルメツアーを企画して食べ歩き、店を紹介し合うなどの交流の仕方も可能だろう。

もう少し時間に余裕がある退職後の方々には、いくつかの授業を公開したり図書館を開放したりして知的欲求を満たしてもらってもよい。この面での需要は大きいかも知れないので、大学および図書館としては調査の上で資格制限や料金の徴収を考慮する必要がでてくる可能性はある。とはいえ熱心に授業に参加する「大人」が近くにいることで学生の経験の幅も広がるであろうし、場合によっては（人によっては）貴重な体験や技術を学生に伝えてもらえるようなこともあるだろう。長期的には社会人大学の制度化や社会人向け講座の充実が求められる。

また、周辺地域の企業・店舗にインターンやアルバイトとして働く学生を増加させるのも効果的である。学生のアルバイトはそれぞれの居住地の近くでおこなわれることが多いので、大学周辺に住む学生を増やすことが大切であり、学生部のアパート紹介サービスの充実などが望ましい。しかし家賃その他の条件、地域の住宅事情などを考慮すると、さほど飛躍的に学生向けの安価な賃貸物件が増えるとも考えにくい。したがって、地域協力という視点からも、不動産情報の紹介機能の充実とともにアルバイト情報の充実に大学が一役買うべきである。上記で紹介した大学近くのドラッグストアを始め、サティまで含めて考えれば、かなり多くのアルバイト先が存在する。また、学内でのアルバイト雇用を増やすのも「授業が終わればすぐ帰る」ような学生を、多少は地域に滞留させる手段となる。学内雇用は学生の通学時間にアルバイト通勤時間という負担を減らすためにも有効である。

その他、大東文化大学から地域に発信できるサービスが多

数ある。あえて具体例は出さないが上記のターゲット人口に合わせたサービスの提供を考慮すれば、このような活動は地元への貢献のみならず大学としての収入源となる可能性さえある。多忙で、意外にこの時間帯に役に立たないのは大学の教職員かもしれない。その点は地元企業で働く方々も同様である。昼休み以外の時間帯には忙しく働いているので、大学・学生との交流などやりたくてもできないであろう。

- 3) 晩（夕方から夜）を使う。5時以降と言えばいいだろうか。この時間帯には域外で働いていた労働者が帰ってくる。同時に、大学および大学周辺の企業や店舗で働いていた人々も自由になる。疲れて早く帰宅したい人もいるだろうが、日によっては余力のあるときもあるだろう。大東文化大の学生の時間帯でいえば4時40分から6時10分の第五時限目やその後の6時限目にあたる時間帯を使うことになる（もちろん必ずしも授業時間としてという意図はないが）。とはいえ、学生にとっても地域住民にとってもリラックスしたい時間帯である。堅苦しい学問よりも芸術がふさわしい。例えば映画や音楽、美術の鑑賞、小説や詩などの文学の朗読や読書会、歌舞伎や中国歌劇、舞踊などを招待して、専門家や趣味人の教授に解説してもらうなど、企画はいくらでもできる。毎週金曜のやはり夕方に、プロ棋士を招いて開かれる囲碁・将棋講座などはすでに実現しており好評を博しているようである。大学内の施設も夕方であれば余裕がある。夜の大学の教室では今はもっぱらバンドの練習などを行っているが、それを他の目的に拡張することにそれ程支障はないだろう。また、大学から外に学生が出てゆく形式もありうる。公民館や地域のカルチャーセンターで行われている会合に講師として、あるいは

生徒として大東文化大の学生が参加する。書道学科や英語学科の学生や、外国人留学生、その他なんらかの特技を持つ学生を発掘して地域の人々との交流に役立てることは、当人にとっても、また地域住民にとってもメリットがある。

地域の人々のなかには、大学教育を受けたいと強く望んでいる方々がいる。これは毎年の公開講座への参加者数（本年は130名あまり）をみれば明らかである。域外からの参加者も募ればひとつの小さな学科を作れる程度の社会人学生を集めることは可能であろう。その際にこの「夜」という時間帯を考慮に入れること、すなわち一種の夜間大学ないし2部制の学部のようなかたちをとることには利点がある。社会人大学を平日の昼間に開講すれば退職後人口が大半を占めるであろうが、夜間であればそれより若い中年層も取り込むことができるのである。現在の公開講座は土曜の午後に開催しており、そこでの経験を生かして平日の夜という時間帯に拡張することはそれ程困難なことではないだろう。もちろん、これを統括する地域連携センターの体制やスタッフの充実は絶対に必要である。

- 4) 週末を使う。上にも述べたが、週末はレジャー活動等で各々の家族が別々に「楽しみ」を最大化しようとするので、週末における地域と大学の関わりというのは意外に難しい。家族向けエンターテイメントにあふれた東京近郊地域にあって、それらよりも魅力的なイベントや企画を大学から提供することを考えてみれば、その困難さは容易に想像できるだろう。そのような「やや大きめの企画」はここで筆者が提案しても詮無いことなので、ひとまずは大東文化大の大きな人的資本である運動部の活用をしてはどうか、とだけ示唆してお

く。しかし運動部に限らず、大きめのイベントの企画には常設のスタッフと予算措置が必要である。そのためには大学に広報課のイベント係を拡大したような部所が必要となるだろう。幸い大東文化大学の組織改変は着実に進んでおり、大学の置かれた一般的状況からみても広報を重視する体制に転換してゆくのは確実である。

そのような企画の過程で欠かせないのは板橋区の「くらしと観光課」との連携である。同課は区の花火大会や区民祭りという大規模なイベントを主催するいわば地域イベントのプロフェッショナルであり、大東文化大学の企画についての協力を仰ぐとともに、区で行う地域イベントに当大学が如何に関わることができるかについて、情報提供と指導を仰ぐこともできるだろう。例えば区民マラソンに大東大の陸上チームが参加するとか、逆に大東Walkという、学生が板橋キャンパスをゴールにして20キロ程を歩くという例年の行事に、地域住民の参加を促すとか、いろいろな相互乗り入れがありうるだろう。

最後に、学生にとっては最大の祭りである学園祭も、板橋キャンパスの整備完了に伴って東松山キャンパスから板橋キャンパスに開催地を戻す予定である。これを機に周辺住民が気軽に入出りできる開放されたキャンパスを創造することは、大学の教育効果を考慮してもメリットが大きい。ゼミナールを何年か担当した筆者の限られた知見に基づく感想ではあるが、大東文化大の学生の多くには他力本願的で問題を自ら解決してゆく能力に欠けるところがある。4年間も無料のバスで駅と大学を送り迎えしているのだから仕方ないのかも知れない。彼・彼女らに公共のマナーや自律の精神を育ててもらうには、「大人の目」を光らせているという点で、キャ

ンパス内の社会人の存在は非常に重要である。とはいえ、週末には平日とは逆に困難になるのが学生の動員である。自分の大学の学園祭への学生の参加の率はさほど高くないのが現実である。やはり多くの学生が大学の近隣に住むことが望ましい。学生にとって板橋区が「第二のふるさと」となり、地域住民とともに地元への愛着を育ててゆくことができれば何よりであろう。

## おわりに

朝・昼・晩・週末と時間帯を区切り、それぞれの時間帯に合わせた人流のタイプを地域の郊外型ベッドタウン化という観点から分析し、その知見から大学と地域の望ましい「関わりかた」についていくつかの提言をおこなった。それら諸提言が単なる浮ついた「夢想」に終わらずに、すこしでも現実味ないしは有効性を帯びたものであるとすれば、それはこの地域に関する分析が多少でも当を得ていたものであったからだろう。複数の時間帯で複数の人口を対象にした、いわばあらゆる機会を駆使しておこなう地域交流は、全体として2つの副次的効果を期待することができる。ひとつは大東文化大学という存在を可視化するということである。大学のアイデンティティという意味でも学生の成長と自身を促すという意味でも、わが大学が「近くにあることは知っていたが見たことはない」「5千人もの学生が通学しているわりには学生の姿を見たことがない」と言われるような「透明な」大学であり続けることはできない。上記の諸提案は、まずは大東文化大学が存在し、その学生が元気に活躍しているということを印象付けるためにある。

そして第二の効果は、あらゆる年齢性別のグループを多角的に



ターゲットにすることにより、周辺地域の人々の大東文化大学およびその学生とのかかわりが、それぞれの家庭で話題に上り、印象が増幅されるということである。そして大東の学生が板橋区北部のこの地域を「第二のふるさと」と感じるようになる頃には、地元の人々の生活の一部に大東文化大学のキャンパスと学生たちが入り込んでいるようになるであろう。郊外型ベッドタウンにある大学としての大東文化大学板橋キャンパスのアイデンティティは、地域住民と学生それぞれの空間的・時間的機能分化を尊重しながら、互いに対面できる時間と場所を徐々に拡張してゆくといった地道な作業の中で初めて発見されるものであると、筆者は確信している。

#### 参考資料

板橋区史編さん調査会「板橋区史（上・下）」板橋区、1998—1999年。